鷗外における自我の問題

福岡章

鷗外は、たとえば漱石のように真正面から自我に対決して、これを執拗に探求していくという態度はみせていない。「自分は少年の時から、余りに自分を知り抜いてゐた」（「キタ・セクスアリス」明・42・7）と書き、「僕は生れながらの傍観者である」（「百物語」明・44・10）と語る鷗外においては、自我はつねに断定の起点であろうとする。また鷗外は、「自分は永遠なる不平家である」（「妄想」明・44・3・4）と言う。不平家とは、現実に対する自我が、不如意を余儀なくさせられるものの謂いであろう。つまり、鷗外の自我は終始遠心の方向をたどるのである。わたくしはこれを、鷗外の「豊熟の時代」（注1）を中心に考察してみたいと思う。

一

「舞姫」（明・23・1）は、鷗外のいう「まことの我」の自覚を表象する作品である。「余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五才になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。」（圏点は筆者）しかし、「自分がまだ二十代で、全く処女のやうな官能を以て、外界のあらゆる出来事に反応して、内には嘗て挫折したことのない力を蓄へてゐた時」（妄想）のドイツ留学を終えて帰国した（明・21）鷗外が、殆どその生涯を「所動的・器械的の人物」たるべき官界に定着せざるをえなかったことは、運命のいたずらというべきであろうか。帰朝後約十年間の鷗外の活躍は、かの「遺鷗論争」や、「傍観機関」やに見られるように、文学上医学上のきわめて戦闘的な啓蒙活動であったように思われる。そして不遇な小倉時代を終え、明治四十年（一九〇七・四六歳）陸軍軍医総監・陸軍医務局長に栄進するにいたって、鷗外の文学生活もまた確乎たる基盤を得

たようである。ここに約十年間、鷗外の生涯における最も豊熟な文学生活が展開されるのである。ここで、この時期における鷗外の文学生活を検討しよう。第一に注意してよいことは、当時の日本の現実とからみあう鷗外の自我が、かなり明確な形をもって表象されている点であろう。たとえば「青年」（明・43・3）の主人公純一は、その頃の政治や社会生活に絶望した純粋な文学青年として描かれている。

今東京で社会の表面に立ってゐる人に、国の人は沢山ある。世はY県の世である。国を立つとき某元老に紹介して遣らう、某大臣に紹介して遣らうと言った人があったのを皆ことわった。それはさう言ふ人達がどんなに偉大であらうが、どんなに権勢があらうが、そんな事は自分の目中に置いていなかったからである。

学士や博士になることは余り希望しない。世間にこれぞと言って、為て見たい職業も無い。家には今のやうに支配人任せにしていても、一族が楽に暮らして行かれるだけの財産がある。そこで親類の異議のうるさいのを排して創作家になりたいと決心したのであった。

しかも、結末において純一の心を占めたものは、やはり現実に対する深い失望感であった。「ああ、併しなんと思って見ても寂しいことは寂しい。どうも自分の身の周囲に空虚が出来て来るやうな気がしてならない。好いわ。この寂しさの中から作品が生れないにも限らない。」ところで、「普請中」（明・43・6）になると、日本の現実を観る鷗外の眼は一層きびしいようである。主人公の渡辺参事官は、かってドイツで知り合ったブリュネットの女を築地の精養軒で迎えて食事をともにする。この西洋風のホテルは、大工がはいって普請中である。食事を終えた女は、そのままアメリカへ渡って行く。言ってみれば、ただこれだけの単純な筋なのである。ソファに腰を掛けて、参事官はサロンの中を見廻す。「壁の所々には、偶然ここで落ち合ったといふやうな掛物が幾つも掛けてある。梅に鶯やら、浦島が子やら、鴎やら、どれも〳〵小さい丈の短い幅なので、天井の高い壁に掛けられたのが、尻を端折ったやうに見える。食卓の拵へてある室の入口を挾んで、聯のやうな物の掛けてあるのを見れば、某大教正の書いた神代文字といふものである。」そして参事官は、「日本は芸術の国ではない。」と思う。ついで参事官は、アンヌマリイ帽をかぶり、刺繍をした白いバチストをつけた女と、「アザレェやロドダンドロンを美しく組み合せた盛花の籠を真中」にした食卓に向い合って、シェリイを注ぎ、メロンを食べるのである。この女はウラジオから日本へ渡ったのであるが、日本は音楽の旅興行には期待が持てないというので、アメリカへ旅立とうということになる。

参事官は、「それが好い。ロシアの次はアメリカが好かろう。日本はまだそんなに進んでゐないからなあ。日本はまだ普請中だ。」（圏点は筆者）という。「浦島が子」や、「神代文字」の掛物に、アンヌマリイ帽やメロンなどの組合わせが滑稽な対象であることに、聰明な鷗外が気付かぬ筈はない。鷗外はそこに、性急な日本の近代化の現実とともに、旧態依然たる日本的現実とを冷酷なまでに抉剔しているのである。ところで鷗外の戯曲の中に、「なのりそ」（明44・8・9）という作品のあることを注意したい。女主人公耿子は実業家大島崇の令嬢である。彼女には法学博士広前との縁談が

もちあがっているのであるが、次に広前との会話を引用しよう(初対面の広前は、自分の名を秘めて、広前の友人になりすましている)。

広前。さやう。まあ、失意ではないでせう。

耿子。では不平なんぞはおありなさらないのですね。(広前をきっと見て、殆ど宣告する如く。)わたくし、生利な事を申しますやうですが、只今の外国の様子を見てお帰りになって日本社会に対して不平のおありなさらない方なら、それは詰まらない方だと存じますの。

広前。(耿子の詞と態度とに刺戟せられて、覚えず、少しく反抗す。)では、あなたは不平家がお好きですか。物好きですね。(強ひて笑ふ)広前なぞは先づ順境ばかりを渡って来た人間と云って好いでせう。現に今だっても逆境にゐるといふわけでもないやうですから、不平家ではありますまい。社会で自分の占めてゐる地位に安んじて、別に誰を羨むとか妬むとか云ふこともなく、まあ、こつこつ為事をして行くらしいですから。

耿子。(又はれ〴〵して微笑む。)あなたは感心な方ね。熱心に弁護してお上げなさいますわねえ。ですけれどあなた誤解して入らっしゃいますわ。わたくしの不平と申しますのは、そんな地位が出来れば無くなってしまふやうな不平ではございませんの。

広前。(少し慌てて)そしてどんな不平ですか。

耿子。まあ、なんと申したら好いでせう。立派な地位にゐても、順逆に立っても、持ってゐる人は永遠に持ってゐる不平ですね。神聖なる不平とでも申しませうか。此不平は、それを持ってゐたって、絲子根性を起して引っ込んでしまふやうな不平ではございません。人間は此不平が動機になって斃れるまで働くのでございますね。

「永遠に持ってゐる不平」と言い、「神聖なる不平」ということばは、いかにもロマンチックなひびきを与えるが、ここに日本の現実に対する鷗外の謹勃たる情念をよみとることができよう。かの「あきらめ」や「傍観者」、さらには「あそび」の態度も、自然主義に対する鷗外の創作態度を表明しただけのものではなくそれは鷗外の深い現実洞察から生まれた、孤高の人生態度というべきものであろう。かくて大才鷗外の自我は現実に安住できず、果しなくカオスの世界をさまよい続けるようである。

生まれてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆られてゐるやうに学問といふことに齷齪してゐる。(中略)策うたれ駆られてばかりゐる為めに、その何物かに醒覚する暇がないように感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生といふのが、皆その役である。赤く黒く塗られてゐる顔をいつか洗って、一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考へて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けてゐる。此役が即ち生だと考へられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思はれる。併しその或る物は目を醒まさう醒まさうと思ひながら、又してはうとうととして眠ってしまふ。(「妄想」圏点は筆者)

ここで「醒覚」ということばに注意したい。鷗外は右のほかにもたとえば、「新しい道徳と言ふものに、頼るべきものがない以上は

古い道徳に頼らなくてはならない、古に復るのが即ち醒覚であると言ってゐる」（青年）とか、「これまで自分の胸の中に眠ってゐた或る物が醒覚したやうな、これまで人にたよってゐた自分が、思ひ掛けず独立したやうな気」（「雁」明・44・9）とかいうように、しばしばこの「醒覚」ということばを使っている。坂本浩氏はこれを、「新しい自我に目ざめる人間から、小さな自我を捨てて大きな我に成長してゆく姿」（注2）として把えているようである。

わたくしはここに、知性人鷗外の性格を歴然と指摘することができる。むしろ天成の知性人であった鷗外（これは鷗外が自然科学者であったこととも関係している）は、それゆえに「跡腹の病めないもの」として、「只芸術と学問との二つ丈だ」と言い、「自分は丁度此二つの外にはする事がなくなった。」（妄想）と述べている。岡崎義恵氏は、鷗外の学問と芸術に対する愛について、「日常の生の背後にある永遠なるものとして、学問と芸術との幻影を浮べながら、自身確実にそれを把握しえなかったと思ふ寂しさが、その諦念の一面の意味を形造ったのではなからうか。」と述べ、ついで、「学問と芸術とだけが無常の生のなかで取繕ることの出来るものであるといふ『醒覚』に達しつつ、その学問・芸術に対する愛が十分に延び切ることを許されなかったといふことは、明治・大正の日本の国情に主たる原因があるのであらうか、それともっと普遍的な人類の悩みに帰し得るのであらうか。」（注3）と論じていられる。これは、鷗外の自我に関する深い秘密を暗示したことばのように思われる。

二

鷗外は、「馬琴日記鈔の後に書く」（明44・2）と題する文章の中で、次のように書いている。

馬琴よ。僕は君の八犬伝の序文を書かせられて、昔愛読した書の二三頁を翻して見た。そして偶然君の弁疏の語を発見した。それは犬江は論外として、犬塚でもなんでも、皆若い癖に老人じみてゐるといふ非難を聞いて、君が「薄衣は八歳にして舜の師たり、辜子は五歳にして禹を佐く」云々と云ってゐる処であった。君は幸福であった。先王だのなんだのと、一般に認められてゐる権威のある世に生れて、その権威の下に自己を保護することが出来た。君は明治四十何年に生れないで、幸福であった。

この、鷗外としてはやや感傷的と思われる文章の中に、じつは鷗外的不平の根源といったものが自ら語られているのはでなかろうか。それは、「権威のある世」に生まれず、そして「その権威の下に自己を保護すること」ができないものの、宿命的な悔恨の情といったものではなかろうか。ここに鷗外のいう権威とは、けっしてニーチェ的なものではないのであって、鷗外自ら「妄想」の中で、「理性の約束を棄てて、権威に向う意志を文化の根本に置いて、門閥の為め、自我の為めに、毒薬と匕首とを用ゐることを憚らない」ニーチェの権威主義を激しく非難していることからも明かである。鷗外のいう権威は、その時代の健全な規範道徳といった、ごく常識的な意味に解してよいように思われる。馬琴の時代の規範道徳は、いうまでもなく儒教道徳であり、いわゆる封建道徳と呼ばれるものであった。しかし、そういう旧い規範道徳の整然たる社会秩序の中に生

きえた馬琴に対して、ある羨望の心を隠しきれないでいる鷗外の口吻に、わたくしは注意したいのである。そしてわたくしはここに、明治という時代に生きた鷗外の胸裡に醸積する深刻な喪失感といったものを明確に看取することができるように思うのである。この際、大胆な言い方が許されるならば、鷗外の歴史小説の執筆心理の中には、この喪失した旧い権威に対する無限の憧憬が潜んでいたのではないかと思われる。もっとも、もともと鷗外には歴史的穿鑿癖ともいうべきものが強かったようで、実録や随筆の類（殆ど近世のもの）も好んで読んでいたらしい。そういう傾向はすでに「玉匣両浦島」（明・35・12）や、「日蓮上人辻説法」（明・37・2）や時代物の戯曲となってあらわれている。

しかし、明治天皇崩御につづく乃木大将夫妻の自刃（明治四十五年九月十三日）は、鷗外をして歴史小説への方向を決定的なものにさせたようである。鷗外は同月十八日、初の歴史小説「興津弥五右衛門の遺書」を脱稿した。三好行雄氏が、この歴史小説の執筆動機について、「殉死という行為そのものの完全な無償性と、無償の献身に自分を投げることのできた人間への讃嘆であり、また、そういう生き方を可能にした武士道という旧道徳体系への驚異でもあったはずである。」（注4）と述べているのは、この際留意されてよいであろう。ところで、鷗外の歴史小説を貫く主題は何であろうか。わたくしはためらうことなく、それは「権威の所在」だと思う。権威を他に置くか、自己に置くかの問題である。もっと具体的に言えば、主君（運命といってもよい）に自己を服従させるか、それとも主君に反逆するかの決定である。いま便宜上、前者の作品系列のものに○印を、後者のものには×印を付し、鷗外の歴史小説を年代順にならべてみると次のようになる（●印のあるものは主人公が女である）

○興津弥五衛門の遺書（大正元年一月）
×阿部一族（二年一月）
×佐橋甚五郎（二年四月）
○護持院ヶ原の敵討（二年七月）
×大塩平八郎（三年一月）
○堺事件（三年二月）
●○安井夫人（三年四月）
×栗山大膳（三年九月）
●○山椒大夫（四年一月）
×津下四郎左衛門（四年一月）
●×魚玄機（四年七月）
○ぢいさんばあさん（四年九月）
×最後の一句（四年十月）
●○椙原品（五年一月）
○高瀬舟（五年一月）
○寒山拾得（五年一月）

さきにも述べておいたように、これらの作品に共通する主題は権威の所在という問題である。もっとも、「歴史其侭と歴史離れ」（大・4・1）の中で鷗外自らが書いているように、歴史小説のすべてが同一の創作態度で書かれたものでないことは明かなことである。しかし、主題の展開と創作態度とは、むしろ異質的な問題と考えてよい。端的に言って、鷗外の歴史小説においては、主題の展開と創作態度との間には、何のかかわりもないのである。

「某儀明日年来の宿望相達候て、妙解院殿御墓前に於いて首尾好く切腹いたし候事と相成候。」の書出しにはじまる「興津弥五衛門の遺書」の後に「だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の気に入らぬからと云って、立場が無くなる筈はない。」という「阿部一族」の世界が急転してくる点を、わたくしは見逃せないと思う。また、「永の御預」になっていた夫が「御免」になって、三十七年ぶりに夫婦が再会するという「ぢいさんばあさん」につづいて、「お上の事には間違はございますまいから」と投げつける「最後の一句」が書かれているのも、これと同じケースのものと言ってよいであろう。　ここで、鷗外歴史小説における主題展開の跡を検討するならば、それはやはり「永遠なる不平家」鷗外の鬱勃たる心情の吐露と言ってよく、同時にまた自己の絶対の権威を確立しようとする鷗外の、苦脳にみちた自我探求の道程を表象するものと考えられる。「椙原品」から「高瀬舟」、そして「寒山拾得」にいたって、ようやく鷗外歴史小説の系列は終っている。「寒山拾得縁起」（大・5・1）は、作者自ら「寒山拾得」の執筆動機を語ったものとして注目されるが、その中で鷗外は自分の子供に向って、次のように言ったと書いている。「実はパパァも文珠なのだが、まだ誰も拝みに来ないのだよ。」これはまた、ずいぶん思い切った口吻である。そこには、自己の絶対の権威を自認する鷗外の抱負といったものがあろう。池田勉氏が「寒山拾得」について、「そこに鷗外は自分の長く願望してきた足ることを知る境地を見出すとともに、その自足の境地を生み出しているものが、実に自分のうちの権威の尊厳にもとづいていることを悟るのである。」（注5）と述べているのは、まことに味わうべきことばのように思われる。ところで、文人の歴史によれば、寒山拾得は風狂人や隠士の元祖とされている。おもうに、「僕は小説は何をどう書いても好いものだと断案を下す」（「追儺」明・42・5）のが鷗外における創作態度の本領であるにせよ、このきわめて超俗的な人物を小説の主人公に登場させたということは、一応驚嘆すべきことではあるまいか。極言すれば、神韻縹渺たる「寒山拾得」の中に、あるいは一種のアナクロニズムに堕する危険性すら指摘できそうである。そしてこの際、いささかわたくしの気になることは、唐木順三氏が述べているように「稀代の有用人である」（注6）鷗外が、はたして寒山拾得の絶対境に安住することができたか、という点である。

三

いかにも、「渡江抽斎」（大・5・1―5）は、鷗外のいだく理想的人間像を表象した大作である。一節を引用しよう。

わたくしは又かう云ふ事を思った。抽斎は医者であった。そして官吏であった。そして経書や諸子のやうな哲学方面の書をも読み、歴史をも読み、詩文集のやうな文芸方面の書をも読んだ。其迹が頗るわたくしと相似てゐる。只その相殊なる所は、古今時を異にして、生の相及ばざるのみである。いや、さうではない、今一つ大きな差別がある。それは抽斎が哲学文芸に於いて、老証家として樹立することを得るだけの地位に達してゐたのに、わたくしは雑駁なるディレッタンチスムの境界を脱することが出来ない。わたくしは抽斎に視て忸怩たらざるを得ない。抽斎は曾てわたくしと同じ道を歩いた人である。しかし其健脚はわたくしの比

ではなかった。迥にわたくしに優った渚勝の具を有してゐた。抽斎はわたくしのためには長敬すべき人である。然るに奇とすべきは、其人が康衢通達をばかり歩いてゐずに、往々径に由って行くことをもしたと云ふ事である。抽斎は宋槧の経子を討めたばかりでなく、古い武鑑や江戸図をも翫んだ。若し抽斎がわたくしのコンタンポランであったなら、二人の袖は横町の蓆板の上で摩れ合った筈である。こゝに此人とわたくしとの間に暱みが生ずる。わたくしは抽斎を親愛することが出来るのである。（その六）

ここに鷗外は、「わたくしは抽斎に祝て忸怩たらざるを得ない」と書き「長敬すべき人」と書き、そして「親愛することが出来る」と書いた。唐木順三氏のことばを借りると、それは鷗外「一世一代の惚れこみ方」（注7）というほかはないであろう。もっとも、抽斎との邂逅は全く偶然のことであったようである。「わたくしは或時ふと武鑑を集め始めた。そして其武鑑を集めて研究した人に渋江抽斎のあることを知った。それから抽斎が嘗に武鑑を集めたのみでなく、あらゆる古本を集めて研究したことを知った。」（「観潮楼閑話」大・6・10、大・7・1）しかし、「寒山拾得」から「渋江抽斎」への系譜は鷗外の偶然的な転身とは言えないだろう。鷗外は「渋江抽斎」につづいて、「伊沢閑叟」（大・5・6）や「北条霞亭」（大・6・10）やの史伝物を書いていったが、それは、「只書きたくて書いている」（観潮楼閑話）のである。

ここにわたくしは、少なくとも「寒山拾得」と「渋江抽斎」との本質的な相違を看取することができるように思う。この相違は、虚構と事実ということばであらわすこともできよう。しかしそれは、絶対を要求しつつも、未だ現実に定着できなかった鷗外の自我が、今ようやくその現実に安住しえたという必然性の中に求められるべきであろう。わたくしは、この「渋江抽斎」が書き上げられた大正五年（一九一六）は、鷗外の生涯におけるエポック＝メーキングな年であったと思う。すでに同年四月、鷗外は陸軍軍医総監・陸軍省医務局長をやめ、ここに三十年来のサーベルをはずし、軍服を脱いだのであった。このとき五十五歳である。いわゆる鷗外の在野時代は、翌年十二月、帝室博物館総長兼図書頭となるまでの約一年八ヶ月にわたる期間であり、随想文「空軍」（大・5・5）がこの在野時代に書かれたことは、この作品を一層意味深いものにしているようである。少し長くなるが、その一節を引用しよう。

わたくしの意中の車は大いなる荷車である。其構造は極めて原始的で、大八車と云ふものに似てゐる。只大きさがこれに数倍してゐる。大八車は人が挽くのに此車は馬が挽く。

此車だっていつも空虚でないことは、言を須たない。わたくしは白山の通りで、此車が洋紙を満載して王子から来るのに逢ふことがある。しかしさふ云ふ時には此車はわたくしの目にとまらない。

わたくしは此車が空車として行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。車は既に大きい。そしてそれが空虚であるが故に、人をして一層その大きさを覚えしむる。この大きい車が大道狭しと行く。これに繋いである馬は骨格が逞しく、栄養が好い。それが車に繋がれたのを忘れたやうに、緩やかに行く。馬の口を取ってゐる背の直い大男である。それが肥えた馬、大きい車の霊でもあるやうに、大股に行く。此男は左顧右眄することをなさない。物に遇って一歩を緩くすることをもなさず、一歩を

急にすにことをもなさない。旁若無人と云ふ語は此男のために作られたかと疑はれる。

此車に逢へば、徒歩の人も避ける。騎馬の人も避ける。貴人の馬車も避ける。富豪の自動車も避ける。隊伍をなした士卒も避ける。送葬の行列も避ける。此車の軌道を横るに会へば電車の車掌と雖も、車を駐めて、忍んでその過ぐるを待たざることを得ない。

そして此車は一の空車に過ぎぬのである。

わたくしは此車の行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。わたくしは此空車が何物をか載せて行けば好いなどとは、かけても思はない。わたくしがこの空車と或物を載せた車とを比較して、優劣を論ぜようなどと思はぬことも亦言を須たない。縱ひその或物がいかに貴き物であるにもせよ。

この、きわめて格調の高い文体の中に、大才鷗外の心象風景がみごとに象徴されている。空車は「むなぐるま」と訓む。鷗外によれば、「わたくしは蓄意して此古言の帶びてゐる時と所との色を奪って、新なる語としてこれを用ゐたのである。そして彼の懐かしくない、軽さうに感ぜられるからぐるまの語を忌避するのである。」と言う。ここでわたくしは、「空車」が、いわば「虚」に立つ世界であることに注意したい。鷗外における虚の思想は、すでに「灰燼」（明・44・10―45・11）の中に荘子の虚舟の話が出ていることからも容易に指摘できる。しかし、鷗外の虚は、いわゆるニヒリズムではない。また、これが「寒山拾得」の虚の世界であるとも考えられないであろう。端的に言ってそれは、「物の両端を敲かずには置かない節藏の思量」（灰燼）から生まれた「たしかさ」と「重さ」とを持つ虚とでも呼ぶべきものではあるまいか。わたくしはこれを鷗外独自の虚の世界だと考えたい。そしてこれこそ、自我の権威を確信する鷗外の絶対境というべきものであろう。

四

近代文学を形成する中核が、文学者の自我にあることは自明のことである。鷗外の文学生活は、近代国家建設という創業の時代から、その近代国家の内部に自ら破綻を生じてくる急激な時代の変転の中に展開された。これを換言すれば、鷗外の文学生活は、日本の文学が新しい自我に目覚めた明治二十二、三年にはじまり、やがてその自我が自己分裂を余儀なくされようとする大正五、六年に終わっている。この急激な変転の歴史の中には、すでに透谷や四迷やの自我の悲劇を見ることができよう。いずれも、固い現実の壁に挫折した近代自我の悲劇である。一方、自然主義の文学者や、白樺派の作家たちには、むしろ楽天的な現実肯定の態度があった。特に自然主義の文学者には、卑小な自我肯定の傾向が濃厚である。

しかし、聰明なる鷗外に、近代日本の現実が到底肯定できるものでなかったことは、既に述べたところである。それは、鷗外における高度の知性と、潔癖な倫理的自我とに基因するようである。おもうに、鷗外における倫理的自我は、かの歴史小説や史伝物やの創作の中に、自らその活路を発見していったと考えられるのではあるまいか。しかし、そのいかなる場合においても、鷗外の倫理的自我はけっして既成の社会秩序を破壞するようなことはなかった。これは、注目してよいことである。「大塩平八郎」の終末に、「平八郎は極言すれば米屋こはしの雄である。」と付言することを忘れないのが

鷗外である。また、仮名遣改良論に対して、真向からその保守主義を主張したのも、鷗外であった。ここに、秩序の人、古典主義者としての鷗外の本質を知ることができるであろう。

ところで、大正七年一月、鷗外は「礼儀小言」を書いた。このとき五十七歳である。

今はあらゆる古き形式の将に破棄せられむとする時代である。わたくしは人のこの形式を保存せむと欲して弥縫の策に齷齪たるを見て、度に慊ざるものがある。人は何故に昔形式に寓してあった意義を保存せむことを謀らぬであらうか。何故にその弥縫に労する力を移して、古き意義を盛るに堪へたる新なる形式を求むる上に用ゐぬであらうか。

永遠なる不平は、なおも鷗外の胸裡に蓄積しつづけているようである。それは、ひっきょう、新しい秩序への「醒覚」をとげるにはいたらなかった鷗外の倫理的自我の、果てなき悔恨の情なのではあるまいか。

（注）

1 加藤周一「鷗外」（岩波講座日本文学史第十五巻近代）

第一、ヨーロッパと青年鷗外（一八六二―一八八八）二十七歳まで

第二、啓蒙の時代（一八八八―一八九九）三十八歳まで

第三、小倉時代（一八九九―一九〇六）四十五歳まで

第四、豊熟の時代（一九〇六―一九一七）五十六歳まで

第五、社会主義と晩年（一九一七――一九二二）六十一歳まで

2 坂本浩「雁の系譜」（解釈と鑑賞、昭和三十四年八月）

3 岡崎義恵「鷗外と漱石」（要書房）

4 三好行雄「森鷗外」（解釈と鑑賞、昭和三十四年一月）

5 池田勉「森鷗外」（成城国文学会）

6 唐木順三「無用者の系譜」（筑摩書房）

7 唐木順三「森鷗外」（東京ライフ社）

（香川県立高瀬高等学校教諭）